

## 経腸栄養ボトルからバックタイプへの変更による経済効果

尾鷲総合病院 NST & CP Complex(NCC)<sup>1)</sup>, 看護部<sup>2)</sup>, 外科<sup>3)</sup>, 薬剤部<sup>4)</sup>  
栄養管理部<sup>5)</sup>, リハビリテーション部<sup>6)</sup>  
藤田保健衛生大学医学部外科学・緩和ケア講座<sup>7)</sup>

大和君代<sup>1)2)</sup>, 東口高志<sup>1)7)</sup>, 加藤弘幸<sup>1)3)</sup>, 井瀬佳子<sup>1)2)</sup>, 川口 恵<sup>1)2)</sup>  
窪田麻紀<sup>1)4)</sup>, 小栗きくみ<sup>1)5)</sup>, 世古容子<sup>1)5)</sup>, 大川 光<sup>1)6)</sup>, 大川貴正<sup>1)6)</sup>  
矢賀進二<sup>1)6)</sup>

【はじめに】尾鷲総合病院が療養病棟を開設して3年が経過した。療養病棟開設と同時に、給食業務が委託となった。経腸栄養ボトルの洗浄・消毒も栄養部で取り扱うことになり感染リスクも考慮し、経腸栄養ルートを一回路りの使用とした。平成17年度よりPEG及び腸瘻造設患者が増加し、療養病棟患者の60%以上栄養管理を必要とする症例で占めており、経腸栄養管理に費やす業務量と経腸栄養剤購入費用の増加を来す事となった。更に、栄養部より配膳された経腸栄養ボトルを病室別の仕分け業務と加水業務が困難となり、経腸栄養ボトルと経腸栄養剤の検討を行った。結果、バックタイプの経腸栄養剤に変更し、業務改善及びコスト削減につながったので報告する。

【方法】1. 各種経腸栄養ボトルの形態について比較検討。2. 各種経腸栄養剤の成分とコストについて比較検討。

【結果】1. 加水業務に問題なく、経腸栄養注入終了後にボトルと経腸栄養ルートをはずす手間が削減できた。2. バックタイプに変更したことで、栄養部に返却する経腸栄養ボトルの水洗い業務が削減できた。3. 経腸栄養ボトルの洗浄・消毒の手間と消毒薬剤の削減ができた。4. 経腸栄養ボトル購入費及び経腸栄養剤購入費用が、概算で年間約38万円削減できた。

【考察及び結語】経腸栄養管理に費やす業務量が多くなり、業務改善を図る目的でバックタイプの経腸栄養剤に変更を行った結果コスト削減にもつながったが、医療廃棄物の面からは、エコロジーではなく、又、在宅への退院される患者にとっては、どの経腸栄養剤を選択するかによっては経済的な負担が大きくなる恐れがある。7月の保健所視察の折りに経腸栄養ボトル一回路りの使用について指導されたが、経腸栄養に必要な物品を含めると年間約1920万円程度の負担が生じる事となる。療養病棟ですでにバックタイプを使用しており、一般病棟への導入もスムーズに行えた結果約810万円程度の負担とすることができた。今後、バックタイプだけでなく疾患別に経腸栄養剤を選択していく必要があり、再使用可能で安価な経腸栄養ボトルも必要となってくる。